九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

元朝侍衛親軍の成立

井戸，一公
九州大学大学院文学研究科

https://doi.org/10.15017/24543

出版情報：九州大学東洋史論集. 10, pp.26-58, 1982-03-25. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

元朝侍衛親軍の成立

井戸一公

目次

はじめに
一　漢人世侯の勢力形成
二　漢人世侯軍事力の構成
三　エヘ＝モンゴル朝の漢軍編成と南宋侵攻
四　元朝侍衛親軍の成立
おわりに

はじめに

周知のように、世祖フビライの即位にあたっては、弟アリフブハとの間にモンゴルを二分する対立抗争が起った。フビライは、即位をしたものの、アリフブハに比し帝位継承の正統性が劣っていたので、それをカバーするために、まもなく対南宋戦に従軍していた漢人軍団の精鋭を京師に集結させた。この漢人部隊こそ元朝侍衛親軍の基幹をなすものであった。元朝の侍衛親軍は、元史兵志によると、世祖のとき五方を象って設けた五衛に始まり、その後増置改易されたのであるが、それは太祖チンギス＝ハン以来四世家によって領せられた怯薛とともに、天子の禁兵として宿衛扈従等の任にあたったものである。[1]

そもそも侍衛親軍というのは、唐の府兵制解体後における、天子の私兵強化という時代的趨勢の中で、五代後梁の太祖朱全忠によって創設されたものであり、宋になると、後周世宗の設置した殿前軍と並んで禁軍を構成し、君主権の確立及び中央集権化の徹底を行なう上での軍事的基礎となった。[2] 元朝の侍衛親軍は、設立時にあっては、基本的にこの制度を沿襲したものである。

ところで、成立時の侍衛親軍は、漢人の精鋭部隊によって構成されており、[3] その長官である都指揮使には、董文炳と李伯祐が当てられていた。[4] 両者はいずれも真定の漢人世侯史天沢の部将であり、そのことは侍衛親軍が漢人世侯、とりわけ史天沢と密接な関係を有していたことを察せしめ

るのである。そこで本稿では、まず真定の史氏を中心に漢人世侯の勢力形成、及び漢人世侯とその率いる部将との結合関係を明らかにし、次いで漢人世侯の軍（私兵）が、エヘ＝モンゴル朝の正規軍に編入され、やがて元朝の侍衛親軍として編成される過程を論じ、さらに元朝侍衛親軍の成立という史実の分析を通して、元朝政権成立史の一側面をうかがい、あわせて元朝政権下における漢人（軍団）の地位・役割について考察してゆきたい。

一　漢人世侯の勢力形成

金朝末期、モンゴル軍の中国への侵入の結果、華北では群雄が割拠し、それらはやがてモンゴル朝に降って既成の軍、民、財の三権を容認された封建諸侯となった。彼らは一様に漢人世侯とよばれており、その中で特に大きな勢力を有したのが、西京の劉黒馬、真定の史天沢、保定の張柔、東平の厳実である。[5] この四者によって代表される漢人世侯について、最初に的確な把握をしたのは愛宕松男氏である。すなわち氏は「李璮の叛乱と其の政治的意義」において、漢人世侯を金末の混乱の中で発生した郷村自衛団の発展した勢力として把え、それが李璮の叛乱の鎮圧を契機に、元朝政権によって解体されるに至る過程を綿密に考証されたのである。[6] ただ漢人世侯の権力構造に関しては、世侯という用語の概念上の不明確さもあって、必ずしも明らかとなったわけではない。そこで本節及び次節では、漢人世侯の勢力形成及びその軍事力の構成（とくに部将との結びつき）を、元朝の侍衛親軍を論ずるというわく内でとりあげ、それによって漢人世侯の具体像の一面を明らかにしたい。従って主たる対象となるのは、侍衛親軍の成立に最も関係するところが大きかったと察せられる真定の史氏であり、その他の漢人世侯に関しては、最小限ふれる程度にとどめることとする。

さて、真定の史氏は、元史巻一四七史天倪伝によれば、もとは燕京の永清県の人であり、史天倪の曾祖倫のとき、室を築くにあたって地中より金を掘り出したことから資産家となり、家塾を建てて士人を招いたり、飢饉の際には饑者を賑わしたりして、河朔にその義侠を以て称せられた。天倪の父秉直は、モンゴルの華北侵入にあたり、同里（興隆里）の数千人を率いて、涿州の木華黎の軍門に降った。木華黎は史秉直に軍職をあたえ配下として用いようとしたが、秉直が辞退したので、その長子天倪を万戸に任じたのである。[7] 史氏一族の詳しい系譜と投降後の一族の動向については、最近発表された池内功氏の「史氏一族とモンゴルの金国経略」[8] に明確な指摘がなされている。それによると、史氏は唐代以来一族から官人を輩出した名家であり、史倫・史成

珪の代には、仕官はしなかったものの財を以て郷里に雄たる大族であり、投降後はモンゴル軍とともに北進し、北京大定府を根拠地として、その地で勢力形成をなしたのである。つまり史氏の勢力形成は、モンゴル軍の中国侵攻と密接に関連していたことになる。池内氏は、史氏が北京に移動しその地を根拠地とすることを述べておられるのであるが、筆者はそれより後、つまり北京から真定に移り真定に勢力を定着するまでを、とくにモンゴルに対する軍事協力の面から検討する。それに先だち、モンゴル軍の金国攻略及び金末の状況を概観しておく。

太祖六年（一二一一）に開始されたモンゴル軍の金国への侵攻は、長城地帯での烈しい戦闘をくりひろげながらも、同年のうちに居庸関を抜いて中都に迫り、群牧監を襲って金朝に多大の損害を与えた。ついで太祖八年には、全軍を三つの軍に分けて、右軍は山西を、左軍は遼東を、中軍は河北山東を、それぞれ攻略した結果、「中都・通・順・真定・沃・大名・東平・徳・邳・海州の十一城」（元史太祖本紀）を除く華北各地はモンゴル軍馬の蹂躙するところとなった。こうした急速な戦局の展開に対処するため、金朝政府は一たんモンゴルと和議を結んだにもかかわらず、貞祐二年（一二一四）五月、南京汴梁への遷都に踏み切った。この遷都に際しては、官僚はいうに及ばず、百万に幾い猛安謀克も河南に遷ったので、華北の民衆は無防備のままモンゴル軍の前に放置されることになった。例えば、雪楼集七卷陳氏先徳之碑に、

金主南播、河北・山東群盗並起。

とあり、また山右石刻叢編十八卷大元國鄉寧縣趙侯墓誌に、

侯在金之季年、爲本縣簿書吏、値天兵南伐、縣民饑凍、逃散殆盡、復爲彊暴者侵掠。

とあるが、当時のことを記している数多くの文献は、一様に華北の各地が盗賊の横行する無政府状態と化していったことを伝えている。こうした中で、郷村では自らの生命・財産を保つために人々が団結し、所謂自衛集団が結成されるのである。自衛集団については愛宕氏の前掲論文に扱われているが、その実際の結成の仕方について氏は言及されていない。その結成方法は、史氏の初期勢力を考える上でも必要であるので、いささか補足的にとりあげてみよう。静修先生文集十七卷易州太守郭君墓碑には、

金貞祐、主南渡、而元軍北還。是時河朔爲墟。蕩然無統。強焉弱陵、衆焉寡暴、孰得而控制之。故其遺民、自相吞噬、殆盡。間有豪傑之資者、則天必誘其衷、使聚其鄉鄰、保其險阻、示以紀律、使不相犯、以相守望、卒之事定而後復業。

とあるが、金の帝室が南に遷り、モンゴル軍が北に引き上

げた後の華北の地は、弱肉強食のありさまとなり、そのなかで、郷村の住民は豪傑を中心にして相い集まり、険阻に拠って紀律を定め、互いに警戒しながら寇盗を防いだのである。そうした自衛集団結成の格好の例を示してくれるのが次の河中府の雷震通の事例である。すなわち渠庵集五雷経歴行状によれば、

天兵南下、與衆入峪南西堡避兵。或給之曰、府中吏民盡走關西、不我顧矣。衆大懼相謂曰、我等烏合於此、不有統属。何以集事。共推君爲都統、得軍三百餘。謹教條、蓄財穀、完吏農力。諭富室、出粟佐軍、募貧者、給其衣食、爲遊兵、伺非常。

とあり、モンゴル軍の侵攻を避けるために、陶邑郷の西南堡に拠っていた郷の人たちは、その集団の統制を保つために、共に雷震通を推して都統とし、郷民の中から軍三百人ばかりを出し、教条を謹んで財穀を蓄え、吏と農の力を完うしたのである。同行状の前文には「祖時、財に饒(ゆた)かにして、人の窮急を賑わすを楽しむ」とあり、「父、諱思齊、字希賢、儒学に邃く、踐履に篤く、化郷に行わる」とあるから、雷震通は陶邑郷でも前代からの有力者と考えられ、その郷における存在は、永清県興隆里における史氏一族と何がしかの共通性を感ぜしめる。それはともかく、自衛集団は、このように概ね郷、村を単位として組織され、統率者には財産があってしかも書籍に通じた、いわば在地の有力者が、郷の人たちに推されて充てられたのである。彼らは、陶邑郷の人たちが郷の西南の堡に入ったように、聚落からあまりはなれていない、一般に堡とか砦とか寨あるいは柵と呼ばれる険要の地に拠って難を避けたようである。[9] これらの自衛集団は、しだいに隣接の自衛集団を併合して大きな勢力となり、やがては金朝の末端衙門である州県につながってゆき、金朝もこれらの勢力を義軍として臨時の官軍にとり入れていったのである。

一方、モンゴル軍は、太祖自らが金国攻略にあたっていたころには、ほぼ全軍が太祖に従って南下したであろうが、一二一四年に太祖が主力を率いて西域遠征に出ると、金国経略のために残された兵力は、半減されたとみなければならない。すなわち太祖西征の後、華北の経略を委ねられた国王木華黎にあたえられた軍団は、王狐(オングト)部一萬、火朱勒(クシクル)部千、兀魯(ウルウト)部四千、忙兀(マングト)部千、弘吉剌(オンギラト)部三千、亦乞列速(イキレス)部二千、札剌兒(ジャライル)部二千、あわせて二万二千のモンゴル騎兵と、耶律禿花麾下の女眞兵及び札剌兒麾下の契丹兵である。[10] この四万ばかりの兵力では、いかに機動力のあるモンゴル軍でも華北全域を平定するのは不可能であったに相違ない。その弱点を補うべく採られたのが他ならぬ投降した漢人の諸勢力を巧みに統御して未降の各地を攻略するという方法

であった。しかし、このことは他面モンゴルに忠誠なる特定の漢人集団を強大な封建諸侯に成長させる契機ともなるのである。その著たるものが史氏一族であった。

史氏一族がモンゴルに投降したのは太祖八年（一二一三）十一月のことであるが、その後の史氏は、池内氏（前掲論文）によって指摘されたように、太祖九年（一二一四）春のモンゴルと金朝との和議成立後、モンゴル軍とともに北上し、翌年三月、モンゴル軍の一翼として一族が奮戦して攻略した北京大定府に根拠地を移すのである。それから後の史氏は、一族の長老史秉直が行尚書六部事となって軍需品の調達を担うなど、北京方面を中心に軍事活動をくりひろげたと考えられる。しかし史天倪の列伝（元史巻一四七）を繙くと、万戸となった史天倪の軍事行動の範囲は、単に遼西地方に止まらず、華北の各地に及んでいることがわかる。すなわち、投降後直ちに木華黎に従って、かの左右中三軍に分けてのモンゴル軍の総攻撃に参加したのを皮切りに、翌年高州・北京を攻めてその地を陥落させ、太祖十年（一二一五）には、詔を奉じ南征して、平州を降し、真定に兵を進めたが、武仙が真定を固守していたため、兵を大名に移してその城を陥れている。ついで十一年には、木華黎に従って反乱を起して金朝に降った王守と合達を益都の楽安県に追襲しており、十二年には山東諸郡を、十四年には河東を、それぞれ徇えている。さらに十五年には、武仙を降し、河北西路兵馬都元帥となって真定に止っている。これらを見てもその東奔西走ぶりが知られるであろう。いち早くモンゴルに投降した漢人は、史天倪の行軍にみられるように、モンゴル軍に従って殆ど華北の全域を転戦し[11]、モンゴル軍の兵力の不足を補っている。このような漢人の軍事活動は、太祖朝において早くも漢人がモンゴル軍の金国攻略に大きな力を発揮していたことを示すものにほかならないが、こうした軍事的協力が、史氏のような漢人世侯を出現させるのに大きな力となったのである。

翻って考えるに、史氏がモンゴルに投降した際には、「里中の老稚数千人を率いた」というから、初期の史氏の勢力は、先述した郷村の自衛集団とほぼ同質のものであったとみなされる。しかし投降後間もない頃、元史巻一四七史天倪伝に、

先倫卒時、河朔諸郡結清樂社四十餘、社近千人。歳時像倫而祠之。至是天倪選其壯勇萬人爲義兵、號清樂軍、以從兄天祥爲先鋒。所向無敵。

とあるように、河朔地方の民衆の中から選ばれた壮勇な者一万人からなる清楽軍を有することとなった。清楽軍は、貧しい士人や民を賑恤した曾祖史天倫を祠ることによって結びついた清楽社の壮丁により構成された。その数一万というのには、いささか誇張があるかもしれないが、ともか

くこの清楽軍こそは史氏軍事力の根幹であった。この軍を率いて史天倪や従兄史天祥はモンゴル軍の先鋒として各地に従軍したのであるが、史氏の一族が北京大定府に移ってからは、その一部は北京に留まって北京における史氏の勢力形成に貢献したのであろう。史氏の北京への移動は、あとで述べる真定鎮守と併せ考えてみると、モンゴルの軍事的配慮によるところが大きかったと思われる。その際鎮守した地方では、かなり広範囲に権限が容認されていたのであろう。北京攻略の戦功による面も多いであろうが、とくに当地方で投降したものは、史氏の傘下に加えられていったようである。例えば、呉文正集巻七崔公墓表には、

崔公姓也。德彰公名也。光甫公字也。大寧富庶縣北韓里公之家也。公之考諱祥、金季聚千衆於鄉、及國朝兵至、以其衆附。得命就領之。既而隷眞定史帥麾下、從史帥、取河北・山東諸縣。

とあって、大寧の北韓里の人崔祥は、モンゴル軍に帰附したのち、もとの郷民を領して史天倪麾下に入っているのである。崔祥は「千衆を郷に聚めた」というから、自衛団の首領とみなされる。つまり史氏はこのように北京方面でモンゴルに来帰した集団をその麾下に加えることによって、その勢力を拡大していったのである。

次いで、史天倪は真定に移るが、このこともモンゴルの戦略と切り離しては考えられない。秋澗文集巻八四開府儀同三司中書左丞相忠武史公家伝には、

上略。及金將武仙以眞定降、王命公兄天倪、充河北西路兵馬都元帥、即鎮守。俾仙貳焉。

とあり、金の九公の一人武仙が投降すると、木華黎は史天倪を河北西路兵馬都元帥とし、真定に鎮守させたのである。つまり降ったばかりの真定は、何よりも治安の安定化が求められ、しかも東西交通の要衝であるだけにその軍事的な拠点としての役割も大きいので、史天倪を鎮守させることにしたのである。戦略的要衝への屯駐は、モンゴル軍の先鋒として各地に従軍するのと同様に、モンゴルに協力的な漢人に課せられた軍事的義務であった。史氏以外で主だったものを二、三挙げてみると、元史巻一四九劉伯林伝には、

壬申歳（太祖七年）、太祖圍威寧、伯林知不能敵、乃縋城詣軍門、請降、太祖許之。中略。太祖北還、留伯林屯天成。遏金兵、前後數十戰。

とあって、威寧で降った劉伯林は、太祖の軍が漠北に引き上げるにあたり、長城内で交通の要衝にある天成に屯駐させられている。劉伯林は漢人の中で最初にモンゴルに降り、その後の勢力は漢人世侯の最たるものであるが、彼もその勢力の拡張は、モンゴルに協力して屯駐した天成を中心に行われたのである。また同右巻一五〇李守賢伝には、

元朝侍衛親軍の成立

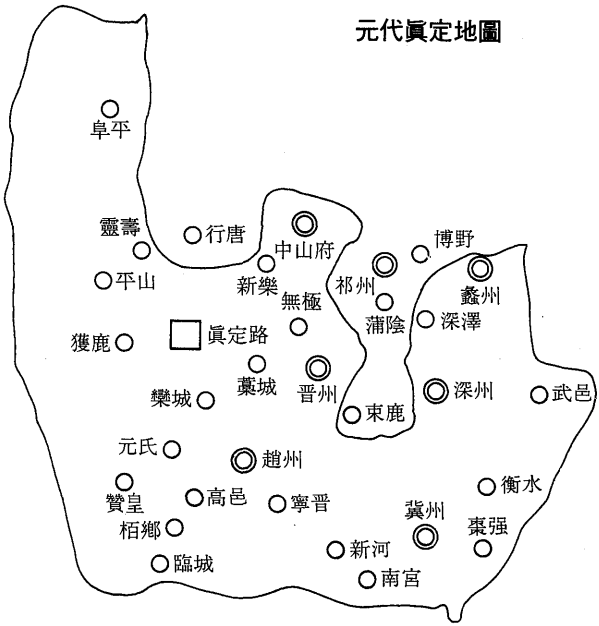
李守賢字才叔、大寧義州人也。略中。朝廷以全晋爲要害之地、人心危疑未定、非守賢鎮撫之不可、乃自錦州遷河東南路兵馬都總管。

とあり、大寧路の人李守賢は、はじめ錦州臨海軍節度観察使に任ぜられていたが、要害の地であって人心の治まらない平陽を鎮撫するため、改めて河東南路兵馬都総管とされている。後文によると、李守賢は雲中方面に軍需品を供給する一方、河南の金朝を攻撃した際の戦功も著しく、子の殼は太宗十三年（一二四一）河東道行軍万戸・兼総管を授けられている。

このように、比較的早い時期に投降してモンゴルに協力的な漢人は、軍事的要地に鎮守して、その地方における人心の懐柔と軍需品の調達とを担うとともに、モンゴル軍に従って各地に出軍したのである。（補註）それによってモンゴルはその兵数が少なかったにもかかわらず、着実に金朝攻略を進展させ得たわけであるが、同時にそうした従軍による戦功や鎮守地での勢力拡張こそが、とりも直さず彼らを漢人世侯にまで押し上げることになったのである。投降後直ちに各地に従戦し、北京、ついで真定に鎮守した史氏はまさしくその典型というべきであろう。

さて、真定に鎮守することになった史天倪は、モンゴルの意向に応えて真定付近を懐柔し、対金攻撃のための兵站基地となそうとしたであろうし、同時に次節で詳述するように史氏自らの勢力を強化するために真定在地の勢力をさかんにその傘下に入れようと画策した。しかし、史天倪は真定に鎮守してより五年たった太祖二十年（一二二五）に、武仙の反乱に遭って殺されてしまう。このため史氏はにわ

元代眞定地圖



かに危機に直面するが、当時北京に還っていた史天沢は、天倪の府僚であった李伯祐、王縉、王守道らとともに、モンゴル軍や張柔ら漢人世侯の援助をうけて、武仙を追い真定を回復するのである。[12] 史天倪が鎮守してまだ日が浅かったため、真定の諸勢力の中には、中山の李全のように武仙に呼応するものもあいついだ。その中にあって、藁城の董俊は終始史天沢に協力し、真定が再び武仙に取られたときには、元帥府の都提控である李伯祐と、史天沢を助け真定を再奪回するのに貢献している。[13] 後に元朝になって侍衛親軍が設立された際、初めの都指揮使に任じられたのが、董俊の長子董文炳と李伯祐であるだけに、このことは注目しておく必要があろう。

史天沢が兄天倪の河北西路都元帥の職を嗣いで真定に鎮してからは、史氏の勢力もしだいに定着し、強化されることになる。かくて太宗元年（一二二九）には、漢人三万戸の一人として真定・河間・大名・東平・済南の五路万戸に任じられているのであり、太宗の七、八年ころにおいても当時の華北の情勢を伝えたものといわれる徐霆の『黒韃事略』に、[5] 華北の四つの大きな漢人世侯の一人に数えられている。これは周知の通りである。

二　漢人世侯軍事力の構成

前節では、史氏が、モンゴル軍に従って華北の各地を攻略する一方、軍事的要地（北京、ついで真定）に屯駐することによって、その地における勢力を形成したことを述べた。本節では、史氏の軍事力の構成を、大まかに、一・モンゴルに投降直後、二・北京大定府鎮守中、三・史天倪の真定鎮守後、四・史天沢の万戸就任後、の四つの時期に分けて、それぞれの時期における史氏の部将の検討を通して考える。ただし、第四の時期の軍事構成は、モンゴルの漢軍編成に直接関わるので、主として次節で扱うこととし、本節では部分的に史天倪真定鎮守後の軍事力強化と結びついた点だけを述べる。

初期の史氏の軍事力を構成したものは、いうまでもなくその一族と清楽社の壮丁一万人よりなる清楽軍であった。モンゴルに投降した後の史氏一族のうち、史天倪がモンゴル軍に従って各地に軍を進めたことは先述したところである。彼以外の一族では、元史巻四七に載せられた各人の列伝によると、天倪の父秉直は、一時投降した家族を管領して覇州に在ったが、やがてそれらを引きつれて漠北に遷り、北京が降った後に北京路都元帥下の行尚書六部事となって軍需品の調達を掌っている。また天倪の弟天安は、はじめ

質子として軍中にあり、のちには行北京元帥府事を授けられており、天倪の従兄天祥はその父懐徳と黒軍を就領し、天倪の先鋒となってモンゴル軍に従軍している。黒軍というのはモンゴル軍に従戦した清楽軍の別称かと思われるが、史氏の軍のほかに、石抹也先や石抹孛迭兒、さらに石天応の率いた軍を指す称呼としても用いられており、それが何を指すかは一概に決められない。[14]

さてその清楽軍についてであるが、この軍こそは初期史氏軍事力の基盤であったにもかかわらず、これに関する記載は殆どみあたらない。ところで、秋澗文集巻四八大元故宣武将軍千戸張君家伝には、

君姓張氏、諱思忠、字正言。盧龍永清人也。中略。父諱仝、資沉粹、少以易業起家爲志。大元甲子（甲戌の誤りか）天兵南略、以良家子從軍、隷元帥史公戲下。以武幹見稱。凡意料且與公契。及公鎮守眞定、得專擢拜、以功監領左軍、充唐山邑宰。

とあって、永清の人張仝が、モンゴル軍の南征にあたって、良家の子[15]であることから軍にあてられ、史天倪の麾下に属し、史天倪が真定に鎮守することになってからは、左軍を監領して唐山県令に充てられていたことを記している。張仝はその出身地が永清県であることからみて、史天倪が壮丁一万人を選んで組成した清楽軍の一員とみなして大過ないであろう。しかし、それにしても清楽軍に属したとおぼしき者は他に見あたらない。[16]それは史氏が北京大定府、ついで真定に本拠を移すに従って、新たな勢力を傘下に組み入れていったので、その軍事力構成が著しく変化したためと推測される。史氏の軍事力を構成した部将がかなり明確になるのは、史氏が北京大定府にいた時と真定鎮守後の時とである。

そこでつぎに北京大定府を本拠地としていた時期に史氏の傘下に入ったものをみると、これには前節で述べた崔徳彰のほか、趙振玉、それに武仙の乱の折真定の回復につとめ創設時の侍衛親軍都指揮使となった李伯祐があげられる。李伯祐については、牧庵集巻五十侍衛親軍都指揮使李公神道碑に、

考諱福、力穡致饒而施、讀書能通其槩、親親長長、下儕輩無忤、仁蟲豸不踐、性由天出、匪學也。生公。諱伯祐。隷太尉兄・金紫光禄大夫・河北西路都元帥麾下十年、其倅武仙、殺元帥一家百口、據眞定叛、而事金。完州・中山皆應之。

とあるだけで、家系や史氏の麾下に入ったいきさつは何もふれていない。しかし史天倪の麾下に隷して十年たったときに武仙の乱に遭ったというから、太祖十年頃に史氏に加わったとみられる。また同神道碑を撰した姚燧は、「李冶

敬齋の三韓李氏先徳の碑を参伍す」というから、李氏は三韓の人であったことがわかる。三韓という地名は、元代には見あたらないが、金代には北京路大定府下の県であったことが金史の地理志によって明らかとなる。とすれば、その来附した時と場所からいっても、史氏が北京を攻略したときか、もしくは北京に移った直後にその麾下に入ったとみるのが妥当であろう。また、趙振玉は、遺山文集巻十三龍山趙氏新塋之碑に、

歳癸酉冬十月、先太師以王爵統諸道兵、長驅而南。兵及永清、都元帥・金紫光禄大夫公首倡大義、建開國之功。太師承制封拜、命公開幕府、駐軍高州。又明年春正月、破北京、龍山降。今眞定路工匠都總管趙侯振玉在籍中、遂隷金紫公幕下、侯雅以幹局爲公所知、選署龍安府庫使。改承(永)安令、遷軍中都提控。

とあるように、史帥即ち史天倪が高州に軍を進め、太祖十年(一二一五)北京を破った時に降って史天倪の幕下に入っている。彼は史天倪にその才を評価されて上京路の隆安府庫使に辟署され、天倪が真定に移ってからは、永安(藁城)の知州となっている。このほか、投降した場所が明記されているわけではないが、元史巻一九三忠義伝に載せられている耶律忒末・天祐の父子も、この時期に史氏に属するようになったと思われる。耶律忒末は契丹人で、太祖九年(一二一四)のモンゴル軍侵攻の際、三万人を率いて内附し、そのあと史天倪に従って趙州管下の諸県を攻略し、史天倪の真定鎮守にともない真定安撫使・洺州元帥となっている。以上のように、史氏はモンゴルの一軍として北京を攻略し、ついでその地を本拠地とする間に、投降した諸勢力をその配下に加えたことによって、勢力を拡大していった。そしてそれら諸勢力によって構成される軍を率いて、真定方面を中心とする攻略に従事し、史天倪が真定に鎮守することになると、彼らをそれに従わせている。すなわち趙振玉が永安知州、耶律忒末が真定路安撫使・洺州元帥、として州県を治したほか、崔徳彰の父祥は管軍千戸・真定同知・權府事、李伯祐は都提控、となって元帥府に所属しているのである。

最後に、史天倪が真定に鎮守するようになってから、在地の勢力でその傘下に入ったものをみると、それに属するものとしては、董俊・王守道・王玉・王善、等をあげることができる。董俊は在地勢力の中では最も早く、太祖十年にモンゴルに投降している。同年には史天倪が木華黎に従って真定に軍を進め、武仙の拠る真定の県城を除いた諸州県を款附したというから、彼もこの時に降った一人であろう(17)。投降後の董俊の行動は詳かでないが、太祖十四年には知中山府事に擢任されており、また武仙の乱に際して史

天沢の真定回復にことのほか尽力したことは既述した通りである。王守道は、元史[巻一五三]本伝に、

王守道字仲履、其先眞定平山人。金七羣盜並起、州縣吏多乘亂貪暴不法。民往往殺令丞及屬吏。宣撫司署守道爲縣尉、衆悅之、因轉攝令、改眞定主簿。史天倪爲河北西路兵馬都元帥、鎭眞定、既收大名・澤・潞・懷・孟城邑之未附者、以爲府經歷。[中略]後擢慶源軍節度使。天澤爲五路萬戶、署守道行軍參謀・兼檢察使。

とあるように、金末宣撫司によって平山県尉・ついで県令につけられていたが、史天倪が真定に鎮守することになると、その元帥府の経歴[18]（職名）となっているのである。彼も武仙の反乱にあっては、武仙の誘いに応ずることなく、史氏の一族、属県の豪強と武仙を真定より放逐するのにつとめている。そして史天沢が五路万戶となった時に、行軍参謀兼検察使に任命されている。王玉と王善は、いずれも元史[巻一五一]に伝がある。すなわち王玉伝には、

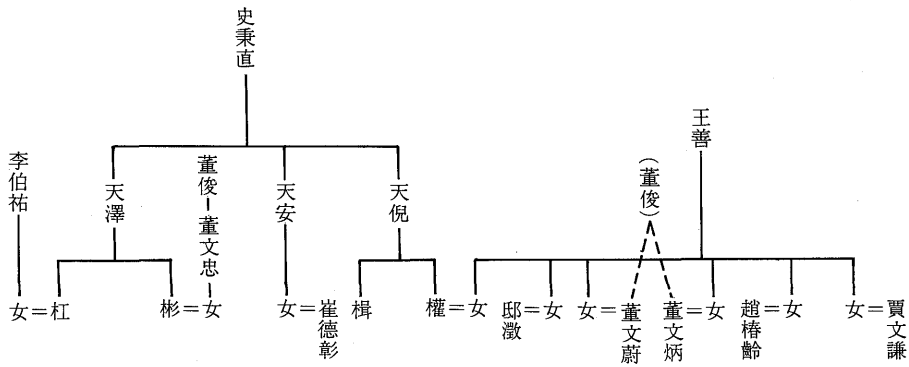
王玉、趙州寧晉人。長身駢脅多力。全季爲萬戶、鎭趙州。太師國王木華黎下中原、玉率衆來附。領本部軍、從攻邢・洺・磁三州・濟南諸都、號長漢萬戶。[中略]師還、署元帥府監軍、以趙州四十寨隷焉。先是金將武仙既降復叛、殺元帥史天倪。宋將彭義斌在大名、陰與仙合。玉從笑乃帶・史天澤、攻敗武仙、生擒義斌、駐軍寧晉東里寨。

とあり、王善伝には

王善字子善、眞定藁城人。[略]中。戊寅、權中山府治中。時武仙鎭眞定、陰蓄異志、忌善威名、密令知府李濟・府判郭安圖之。己卯秋、濟・安張宴伏兵、召善計事。[略]中。遂率衆來歸、授金符、同知中山府事。[略]中。癸未、進金吾衛大將軍・左副元帥。仙窮迫請降、詔命復舊鎭。善奏、仙狼子野心、終必反覆、請修城隍備之。未幾、仙果叛、率衆來攻、火及西門、善出戰却之。

とある。王玉は金末に趙州の万戶となり、モンゴル来附後は長漢万戶と号してモンゴル軍に従って河北、山西の各地を攻略し、元帥府監軍に辟署されている。王善は金末に権中山府事となり、太祖十四年に来帰すると同知中山府事となり、同十八年には左副元帥となっている。二人とも史天倪の麾下にあったことが明記されているわけではない。けれども武仙の乱に際しての対応は、一致してモンゴル、史氏の側にあって武仙を破るのにつとめていること、さらに元帥府監軍、左副元帥という二人の官職は、いずれも都元帥府下の職名であることから[19]、それは史天倪が河北西路都元帥として何らかの支配力を及ぼしたことを想定させる。確かに当時の漢称の官職は自称に過ぎないといわれるけれども[20]、それが全く無秩序に使用されたとは思われないので

眞定の史氏をめぐる婚姻關係



（備考、王善の女は順不同である。）

ある。つまり史天倪が真定に鎮守するようになると、在地勢力のうちでモンゴルに与するものは、しだいに史天　の統率下にくみ込まれていったと考えられる。そしてその関係は史天沢が武仙を破りあらためて真定に鎮守することになると、一段と明確になっていったであろう。王玉が権真定五路万戸となっているのは、その端的なあらわれにほかならない。かくて史氏は、在地勢力を麾下に組み入れることによって、しだいに真定にその勢力を定着化していったのである。[21]

ところで、史氏はこうした勢力の強化と維持のために、さかんに次のような婚姻関係を結んでいる。史氏の姻戚関係のうち女真人と北京の諸勢力とに関しては、既に明らかにされているので、[22] ここでは真定の諸勢力とのもののみを取り上げる。上図は史氏と王善との姻戚関係を軸としながら、それにかかわりをもつ在地勢力の婚姻関係を示したものである。

史氏と王氏は、史天倪の子権が王善の女を娶っていることでその姻戚が成り立っている。王善は常山貞石志巻十五故金吾衛上将軍・知中山府事王公神道碑によれば、十一人の娘があり、その主だった嫁ぎ先は上図にみられる如くである。史権に嫁いでいる一女をのぞくと、曲陽征行千戸の邸澂、董俊の子文炳と文蔚、永安州同知趙迪の子椿齢、順天

征行千戸賈文謙にそれぞれ嫁しているのである。董俊と趙迪が真定の在地勢力であることはいうまでもないが、賈文謙は保定の漢人世侯張柔の裨将賈輔の一族であろう。このことは婚姻関係がたんに漢人世侯とその下の小世侯との間に結ばれているにとどまらず、小世侯同士の間でも一般的に取り結ばれていたことを物語るものである。つまり史氏はそうした真定在地の小世侯の中で王善と董俊[23]との間に婚姻関係を結ぶことによって、在地における勢力の定着化を計ったのであり、王善と董俊も両者の間にみられる如く、互いに姻戚によって結びつき、それぞれの勢力を保持したのである。

また史氏は董俊とならぶ裨将李伯祐とも姻戚関係にあった。既述の如く史氏は初期には清楽軍とよばれる郷兵を有するだけであったが、しだいに北京方面において新たに投降した諸勢力を併合し、やがて真定に鎮守することになると、在地の諸勢力を麾下に組み込んでいった。従ってその勢力は複雑な諸要素をふくみもつものであったといえよう。そうした勢力内の安定を保つ上にも婚姻関係は欠かせなかった。李伯祐との姻戚はまさしくその著例といえる。すなわち牧庵集巻九侍衛親軍都指揮使李公道碑には、

略上。後太尉使經略干汴、屯田河南。立平宋基。以公年先一紀無從、留後眞定。攝萬戸府、給軍之須、約相婚姻。

とあり、史天沢が河南経略使となって河南に赴くにあたって、年輩である李伯祐を真定にとどめ、軍需品の供給を担当させた。その確固たる結束のために婚姻を約したのである。事実同神道碑の後文によれば、李伯祐の女が史天沢の中子杠に嫁しているのをはじめ、彼の女孫三十四人中六人が史氏に帰したといわれる。つまり両氏の姻戚は一時的なものではなくて、数代（二代）に及んだのである。それは崔徳彰にあっても同様である。[24]呉文正集巻六題崔氏孝行詩巻に

眞定崔使(使)擢(擢)卿、相繼宰兩邑。建平而崇仁。俱有美政。昔得之傳聞、今得之親見。適一二客來過、周行東西南北之人也。頗通四方政俗、善評一時人物、相與聚談。其一曰、崔侯何以能若是。其一曰、史侯喬木故家也。同知真定路總管府事之孫・兩浙江淮漕運使之子。史、崔眞定巨室、二姓世爲婚姻。

とあるように、史氏と崔氏は世々婚姻をなしたのであり、それ故に崔氏は真定の巨室たり得たのである。

このように姻戚関係を結ぶことによって勢力の維持と強化を計ったのは決して史氏に限られるものではない。例えば、金の中都留守より降って保定の漢人世侯となった張柔においても同じようなことがみうけられる。郝文忠公集巻三五公夫人毛氏墓銘には、

二女、長適喬侯之子琚。略中。次適易州太守郭某。

とあり、張柔の娘のうち一人は裨将喬惟忠（毛氏の姉の夫）の子琚に、もう一人は郭某に、それぞれ適いでいる。郭某というのは、静修文集巻七「易州太守郭君墓銘」に「考彦成、以醇謹勤力、爲蔡公所倚任、嘗攝行元帥事。君（弘敬）性警敏美姿容、讀書善射、蔡公器之、復以女妻焉」とあることによって、郭弘敬であることがわかる。公夫人毛氏墓銘には、張柔帳下の将校についての記述があり、それによると、「時門下將校百餘人、多與公故等夷、或刮金飲血之友、或布衣刎頸之交、或擒獲屈膝彪勇之士、或反覆變詐姦宄之人、皆方資之、以爲用」とある如く、もとの同輩や布衣刎頸の友に加えて、降参したものや姦宄の徒も含んでいた。真定の史氏のように二度も本拠地が代わるというようなことのなかった張柔にあっても、その軍事構成は決して単純なものではなかったのである。従ってこの場合も勢力の強化と維持に婚姻関係は極めて有効なものとなったに相違ない。[25]

以上を要するに、史氏は初めは一族と清楽軍と号する郷兵によって構成される小さな勢力にすぎなかったが、その軍を率いて華北の各地をモンゴル軍に従って攻略し、ことに北京攻略に著しい戦功をあげてその地に留まるようになってから、[8] 北京地方で投降した諸勢力を麾下に加えて勢力を拡大した。ついで史天倪が真定に鎮守することになると、モンゴルの側にある在地勢力を麾下に組み入れて、真定にその勢力を定着化せんとした。史天倪が武仙の乱に倒れたあと、史氏の真定における権力基盤の確立は史天沢に引きつがれ、彼によって一段と進展していった。そうした勢力の定着化と内部秩序の維持のために婚姻関係が頻繁に結ばれたのである。具体的にいえば、既に北京にありしとき、吾也兒等[22]らと姻戚となることによってその勢力を形成した史氏は、真定に移ってからも、北京で麾下に入った李伯祐や崔徳彰と婚姻関係を結んでその結束をかためる一方、在地勢力の董俊、王善らともその関係を結んで、真定における勢力の定着発展をはかったのである。姻戚関係を結ぶことはたんに史氏に限られたことではない。しかもそれは漢人世侯とその下の小世侯の間にみられるばかりでなく、小世侯同士でも縦横に結ばれていたのである。

三　エヘ＝モンゴル朝の漢軍編成と南宋侵攻

太祖朝における漢人世侯は、モンゴル軍に従って華北各地の未降の地を攻略することが義務づけられ、なかには史氏の如く軍事的要衝への鎮守にあたるものもあった。しかし概して言えば、彼らは金朝の官制をなかば自称化して用いており、そこにモンゴル軍制の適用は殆ど見出せない。

本田実信氏は「チンギス＝ハンの軍制と部族制度」で、太祖末年の兵数について、ラシードの集史に依拠しながら、「親衛隊の一万人という数は、太宗オゴタイ時代になっても変わらなかったが、千人隊の方は、オイラトの四つの千人隊と契丹軍・女直軍各々十の千人隊が編入されたので、チンギス＝ハンの歿年時、その全軍の兵員数は十二万九千人となった」[26]と述べられている。太祖朝の漢軍については、なお考察すべき点があるが[27]、ここでは一まずこの見解に従い、以下は太宗朝から憲宗朝までの漢軍の編成と南宋攻撃を、史氏の軍事力の推移に留意しながら論ずることとする。

周知のように、太宗オゴタイ＝ハンは一二二九年に即位すると、三万戸を設けて漢軍の統一的な編成を行った。三万戸に任じられたのは、元史巻一四九劉黒馬伝によると、劉黒馬を筆頭とし、重喜と史天沢がそれに次いだという。このうち重喜は、石抹札剌兒と記すものと、粘合重山と記すものがあって、定かとしない[28]。史天沢の万戸就任については、元朝名臣事略巻七丞相史忠武王伝に、

太宗即位、公入覲。朝議方選三大元帥、分統漢地兵。上素聞公賢、以杖麾公及劉哈瑪爾・蕭某居右、詔爲萬戸。其居左者、悉千夫長。遂以眞定・河間・大名・東平・濟南五諸侯兵隷焉。

とあるように、真定・河間・大名・東平・済南の五諸侯の兵を管領するものであった。このとき三万戸の下に設けられた千戸は、元史巻一六六石抹狗狗伝に「會立三萬戸・三十六千戸、以總天下兵」とあることによって、三十六人いたことがわかる。ただしこのときの千戸の数を記したものはこの一例しかないため、その詳細は明らかにし難い。

それはともかく、この三万戸の設置は、太祖朝の漢人世侯の軍事力をある程度継承する形で行われながらも、いまだ統属関係の明確でなかった各世侯をはっきりした統属関係に置くことにしたのである。史天沢の場合、済南など五路の兵が彼に隷属することになったわけであるが、その勢力基盤である真定においても明らかに変化が見出せる。牧庵集巻二二真定新軍万戸張公神道碑には、

公諱興祖、姓張氏、中山無極人。會大父・大父不仕。父林、趙州觀察使、改節度判官。丞相贈太尉史武公爲萬夫日、隷其戲下。太宗賜金符・千戸。

とあって、張林は史天沢が万戸となったときにその麾下に隷し、千戸となっているのである。張林は千戸となる前には趙州の節度判官であったが、この記載から推すと、その間史氏との統率関係はなく、史天沢が万戸となってはじめてその麾下に入ったと思われる。また同右巻五十董文忠神道碑には、

太宗以太尉爲眞定・河間・東平・濟南・大名五路萬

戸、左副長千夫。

とあり、史天沢が五路万戸となったとき、それまで左副元帥であった董俊は千戸となっているのである。董俊のほか、前節でとり上げた史氏の部将のうち、史天沢が五路万戸になった太宗元年ころをさかいに官職の変化が見出せる者には、王玉、王守道・李伯佑がいる。すなわち王玉は元帥府監軍→権真定五路万戸、王守道は慶源軍節度使→行軍参謀・兼検察使、李伯祐は都提控→鎮撫軍民都弾圧、とそれぞれ変わっているのである。このことから史天沢の軍内部にも編成による影響を窺うことができるが、この編成によって史氏は真定にその勢力を一層定着化させることになったであろう。その意味でも三万戸編成は画期的なことといえるのであるが、これによってすべての漢人世侯の軍がモンゴルの正規の軍に組み込まれたとは考えられない。なぜならば、史天沢下に配属された五路には、本拠である真定はともかく、東平の厳実、済南の張栄、大名の王珍といった、いずれも行省（行台）を以て称せられる藩鎮的な存在があり[29]、その勢力は史天沢と比べて大きく隔たるものではないからである。従ってそれはかなり限定的なものであったとみなければならない。けれども、このことによって漢人世侯の間には一定の秩序がもたらされることになり、また停滞したモンゴルの対金攻略を打開することにもなる。

太祖が西城に遠征した後、中国経略は木華黎（彼のあとは子の孛魯）に委ねられて推し進められた。この間華北には武仙に代表される金側の勢力があったとはいうものの、大局的にみるなら、モンゴルと金とは黄河を境界線として対峙する状態にあった。こうした中で大宗オゴタイは即位の翌年七月、自ら大軍を将いて南征し、沢州、鳳翔・済南の三方面より河南に侵攻した。この攻撃によって金朝は急速に衰退し、四年後の太宗六年（一二三四）には滅亡するのである。この間にあっても、史天沢の部将董俊や河間の鄭義が帰徳で戦死したのにみられるように、漢軍の活躍にはめざましいものがあった。

太宗は金朝を滅ぼすと、その論功行賞として、またひき続く南宋との戦いに備えて、再び漢軍の編成を行った。元史巻四九一劉黒馬伝には、

會増立七萬戸。仍以黒爲首。重喜・史天澤・嚴實等次之。

とあり、七万戸に増立された際、なお劉黒馬が首位にあったことがわかる。この記事は、庚寅（太宗二年）から癸巳（同五年）の間に載せられているのであるが、厳実が万戸に陞されたのは、次の史料にあるように太宗六年のことであり、従って七万戸の設置も太宗六年と解するべきであろう[30]。すなわち元朝名臣事略巻六厳武恵公伝には、

甲午（太宗六年）、朝於和林城、授東平路行軍萬戸、偏裨賜金符者八人。

とあって、厳実は太宗六年に和林城に入覲し東平路行軍万戸を授けられているのである。行軍万戸と言われるのは、戦時編制によって戦線に出向いたからであろうが、このとき彼は東平路管民長官の職も兼領していた。そのことは既に安部健夫氏が指摘されている。氏によると、この時の東平路の支配のあり方は、「路の行軍萬戸管民長官としての厳實の下には、八人の州の行軍千戸管民長官がおかれ、州はさらに縣の管軍管民長官に支配させる仕組みになっていた」のである。[31] 安部氏のあげられた千戸を参考にしながら、厳実の部将の官職を検討してみると、太宗六年に千戸となったことが判明するのは張晋亨と石天禄だけであるが、趙天錫と劉通それに斉珪もこの頃千戸となったと考えられる。彼らのその時の官職の変化を、元史にたてられたそれぞれの列伝によって抜き出すと、張晋亨は恩州刺史・兼行台馬歩軍都総領→東平路行軍千戸、石天禄は東平路都元帥→征行千戸・済・兗・單三州管民総管、趙天錫は左副元帥・同知大名路兵馬都総管事→行軍千戸、劉通は左副都元帥・済南知府・徳州総管・行軍千戸→上千戸、斉珪（子秉節）は前職不明→無棣県尹・攝征千戸、となる。右の五人の中で、石天禄を除く四名は以前から厳実の麾下にあったが、石天禄はその前職が山東路都元帥であることから推すと、この時あらたに厳実に隷属することになったのであろう。それに彼らの前職は一様に都元帥か行台に関するものであるのに対して、太宗六年にはモンゴルの軍制である千戸に変わっているのである。要するに、厳実は万戸に任じられることによって、幾分変更はあったものの、東平における支配を容認されたが、その反面それまで殆ど統制の加えられなかった彼の軍（私兵）は、モンゴルの正規軍に編入されることとなったのである。

太宗六年に万戸となったものには、保定の張柔もいる。張柔は同年入覲した際、太宗に軍事的貢献が認められて万戸に推されたのである。[32] 彼の部将でその時千戸に任じられたものとして、喬惟忠と賈輔の二名を確認することができる。郝文忠公集（巻三十六）喬千戸行状には、

河南平、張公入覲。以公將行營征淮南。歲甲午、朝廷論功。張公陞奏曰、臣馮籍國家威靈、所向克捷。臣何力之有。亦臣有一二爪牙熊虎之助。臣之副將喬惟忠、戰功甚多、乞加寵異。於是朝廷以璽書・金符錫公。仍以千戸、世其封。自是連年大擧伐宋、公感戴恩遇、益自奮勵。

とあり、副将喬惟忠は、論功行賞で張柔の推薦によって千戸となり、ひき続いて行われた南宋戦には益々自励したと

いうのである。また滹南遺老集巻四十二千戸賈侯父墓銘には、

略上。及歸聖朝、勲績益著。自招撫使、累遷河北東西等路左副都元帥。甲午中、朝廷更定官稱、選充行軍千戸云。

とあって、河北東西等路都元帥張柔麾下の左副元帥であった賈輔は、太宗六年に官称が更定されたとき、行事千戸に選充されているのである。ここに「朝廷が官称を更定す」といっているのは、金末の混乱期に自称化していた官職が、この時に至ってモンゴルの軍制に統一的に改められたことを指しているのであろう。このことは換言すれば、太祖朝には殆ど行われなかった漢軍の正規軍への編入が、先の太宗初年の三万戸設置を皮切りに、この太宗六年に至って全面的に実施されたことを意味する。かくて正規軍に編入された漢人軍団は、新たに対南宋の前線にくり出され、モンゴル騎兵と協力しながら南宋侵攻にあたることになるのである。

太宗は金朝を滅した翌年、南宋への本格的な攻撃にのり出し、皇子闊端を秦鞏に、皇子曲先を襄陽にそれぞれ派遣した。漢人万戸の劉黒馬や史天沢・張柔がそれに従軍したことはいうまでもない。ところが、太宗十三年（一二四一）にオゴタイが没すると、モンゴルの朝廷は脱列哥那、定宗、海迷失と受けつがれるが、この間政治は混迷し、戦意も低下した。

一二五二年に即位した憲宗は、分権的な傾向に対して、三行尚書省―中国に関しては燕京等処行尚書省[33]―の設置や壬子年籍の作成にみられるような中央集権的政策を打ち出し[34]、一方南宋に対しての本格的な攻撃を再開する。このときフビライは憲宗の同母弟であることによって、漠南漢地の「総督」に任じられ、漢地における一切の権限を委ねられることになった。このことが、フビライと許衡、姚枢・商挺・郝経等の漢人知識人、及び史天沢、張柔、董文炳等の漢人世侯とを深く結びつけることになるのである。

憲宗は即位すると、茶寒と葉了干に両淮等処蒙古漢軍を、帯答兒に四川等処蒙古漢軍を、和里觧に土蕃等処蒙古漢軍を、それぞれ統率して征進させ[35]、翌年にはフビライに命じて大理を遠征させた。同じ憲宗二年には、南宋経略を恒常的に推進するために、汴梁に河南経略司が立てられた。元史巻四世祖本紀壬子年条によれば、

宋遣兵攻虢之盧氏・河南之永寧、衛之八柳渡。帝言之憲宗、立經略司於汴。以忙哥・史天澤・楊惟中・趙璧爲使。陳紀・楊果爲參議。俾屯田唐・鄧等州、授之兵牛、敵至則禦、敵去則耕。仍置屯田萬戸於鄧、完城以備之。

とある如く、南宋軍の侵入に悩まされたフビライは、憲宗に進言して経略司を設け、唐州や鄧州などに屯田させることによって河南における軍事基地を築こうとしたのであ

る。河南経略司の具体的な任務については、郝文忠公集巻二十瑞麥頌に、

歲壬辰（太宗四年）、王師濟河、河南亡。釁孽餘猘、狡狡蝟興。兵鋒遺黎、虔劉殆盡。中略。今上即位、宵肝求瘼。詔太弟都督諸軍、謂、將有事於宋、必先事於河南。河南既治、本根既固、藩墻不穴、資糧鎧馬扉屨足、而漢淮可圖也。於是詔分陝東・河南諸道。有金故地、置經略司於汴。命萬戶史公・行臺趙公・及中貴荅焉。公等既至、乃議事典、約法制、鉏桀驁、去蟊賊、撫單弱、出滯淹、布屯戍、均賦輸。抉索利本、掐摄弊萌、進用老成、設施比次、井井以進。暮年報政、帑有餘資、庚有餘粟、四鄙不警、民狎於野、風雨時順、歲乃大穰。

と記されている。

金朝滅亡後の河南は、極度に荒廃し、盗賊が横行して住民は四散してしまった。そのため経略司を立て河南の復興を計り、南宋攻撃の基地としようとしたのである。その職務は民政・軍政の多岐にわたっているが、なによりも屯田の経営に重きが置かれたと考えられる。その長である経略使には、忙哥、史天沢、楊惟中・趙璧が充てられている。忙哥については明らかでない。[37] 楊惟中と趙璧はいずれも文人であるから、行政一般を担当したのであろう。[38] この四人のうち、軍事面で最も大きな権限を付与されたのは史天沢とみて大過あるまい。史天沢は太宗の初期から三万戶の一人として常に漢人世侯の代表的存在であった。河南経略使への就任は、一段とその地位を向上させることになったと考えられる。

河南に経略司が立てられ、諸州に屯田が経営されることになると、華北の漢人軍団は次々と河南に派遣されることになった。そこには、漢人世侯の軍（私兵）であってモンゴルの正規軍に編入されたものはもとより、乙未年籍及び壬子年籍の作成によって新たにモンゴル政府に把握された民戶の中から僉軍されたものも加えられた。元史巻一四七史枢伝には、

甲寅（憲宗四年）、初籍新軍。天澤以長兄二子各有官位、而仲兄之子未仕、乃奏樞爲征行萬戶、配以眞定・彰德・衛州・懷孟新軍、戍唐・鄧。

とあり、史枢は真定等で籍された新軍を率いて、唐・鄧両州に赴いている。元史巻一四八厳忠済伝には、

忠濟初統千戶十有七。乙卯（憲宗五年）、朝命括新軍山東、益兵二萬有奇。忠濟弟忠嗣、忠範爲萬戶、以次諸弟暨勲將之子爲千戶、城戍宿州蘄縣、而忠濟皆統之。

とあって、厳忠嗣・忠範兄弟はともに万戶となって宿州に駐屯した。厳忠範は初め十七の千戶を統べたというから、この時には厳氏一門で四万に近い兵を有したことになる。

また元史五三巻一劉斌伝には、

乙卯、陞濟南新舊軍萬戸、移鎮邳州。

とあって、張栄の部将劉斌は、憲宗五年に済南新旧軍万戸に陞進し、邳州に鎮したのである。

ここで、史天沢とともに、太宗元年万戸に任じられた劉黒馬について若干考察する。劉黒馬は憲宗朝にあっても、世侯の首領たる地位は変わっていない。元史四九巻一本伝に、

丁巳（憲宗七年）入覲、請立成都以圖全蜀、帝從之。成都既立、就命管領新舊軍民小大諸務、賜號也可禿立。

とあって、成都を四川経略の拠点とし、その地の新旧の軍民を管領した。成都に経略司が設けられたと記されているわけではないが、この場合も河南の如く、軍事基地として恒常的に軍を駐屯させたのであろう。つまり四川における劉黒馬は、河南の史天沢と同じように、その方面に派遣された漢人軍団の統率にあたっていたのである。憲宗七年にフビライが漢人の人心を得ているという讒言―彼の漢地重視主義に対する批判―があり(39)、その処置のために阿藍答兒等を遣わした際、劉黒馬と史天沢を直接処罰する対象からはずしていたのは、この二人が漢人の中で最も重用されていたからであろう。

さて、憲宗は八年（一二五八）、南宋への総攻撃にとりかかり、自らは四万の軍を率いて六盤山より重慶をめざし、フビライには大勝関より鄂州へと進軍させた。このときフビライに従った漢軍は、順天路軍民万戸張柔・行軍万戸邸浹・大名路行軍万戸王文幹、水軍万戸解成、等である。河南経路使史天沢は、隴州より南下する憲宗本隊を支援するために合州に赴き重慶を攻めている。紫山大全集七巻十大元故明威将軍同僉書東川行枢密院事王公神道碑に

公諱仲仁、起身蔡國公帳下、以才勇拜百夫長。再受銀符、鎮撫諸軍事。歳戊午（憲宗八年）、分隷今開府儀同三司史公部曲。扈從憲宗皇帝、平西南夷、爲上前驅。

とあり、また元史五四巻一李進伝に、

李進、保定曲陽人。幼隷軍籍。初從萬戸張柔屯杞之三叉口。中略。戊午、憲宗西征。丞相史天澤時爲河南經略大使。選諸道兵之驍勇者從、遂命進爲總把。

とある如く、史天沢は河南に屯駐した諸道の驍兵を兵を選んで従軍している。もともと張柔の部将であった王仲仁と李進は、このとき史天沢の率いる部隊に入れられた。諸道の驍勇というから、彼の部隊に入れられたものは、張柔の麾下であったものに限られるわけではないのである。モンゴルの南宋総攻撃は、こうして始められたが、憲宗九年七月、憲宗が合州で病死したことによって中断されることになる。憲宗なきあと、モンゴル本土では阿藍答兒、渾都海、脱火思らが、次の皇帝としてアリフブハの擁立をはかり、

漠北諸部及び漠南諸州より兵を集め、フビライの先機を制しようとした。これに対してフビライは、雲南から長沙をめざして北進する部将兀良合台の消息を得るために、しばらくは鄂州にとどまって南宋軍と抗戦した。[40] しかし北方の情勢が急を告げたので、十一月に江上の軍を張柔らに督させて北上し、翌年三月開平において即位したのである。

四　元朝侍衛親軍の成立

中統元年（一二六〇）三月、アリブブハとの抗争のなかで即位した世祖フビライは、その政権を確乎たるものとするために、先に憲宗朝に彼が漢地の「総督」として臨んだとき以来、結びつきの強かった漢人の協力を得て、新たな政権機構を創設した。すなわち中央地方の行政においては、十路（道）宣撫司と中書省を設けており、また軍制においては、本節で述べる侍衛親軍を設置しているのである。十路（道）宣撫司は、中統元年五月、既に前月設けられている京兆、西京を除く、燕京、真定、大名彰徳、益都済南、東平、河南、平陽太原、北京の各路に設置された。宣撫使は、在開平、在任地各一員よりなり、[41] 主に世祖潛邸の旧臣が任じられ、国初以来勢力を保持していた漢人世侯の監視と民政への直接関与を重要な任務としたのである。[42] 中央執政機関である中書省は、中統元年四月に設けられ、同七月憲宗朝の燕京行尚書省を接収する形で置かれていた燕京路宣慰司と部分的に合流し、翌二年二月、開平に移り、同五月には再編人事が発令されて、憲宗朝の怯薛丹の長であり領断事官であった不花と、河南経略使の史天沢を中書右丞相とする新しい首脳部が定められたのである。[43] 不花はその前歴から見ても適任であるといえるのであるが、ここに史天沢が抜擢されているのは、以下にのべる侍衛親軍成立のいきさつと切り離して考えることができないのである。

さて、侍衛親軍は、世祖の即位後間もなく設けられ、中書省など行政機関の設置とあいまって、その支配権力の確立、強化を推し進めることとなる。それは、設立当初の中統年間には武衛軍と呼ばれており、宋や金の制度にならって侍衛親軍と称せられるようになるのは、至元元年十月のことである。[44] そこでまず、武衛軍の設置年代についてみるに、元史巻八十六百官志右衛条では、それを中統三年のこととするが、既に中統元年、しかも世祖即位直後に設けられたとみるべきである。[45] すなわち、元史巻四中統元年四月乙丑条には、

徵諸道兵六千五百人、赴京師宿衛。

とあり、即位より一月後の四月二十八日には、諸道の兵六千五百人を徵して京師で宿衛させているのである。また道園学古録巻十二翰林学士承旨董公行状には、

庚申、世祖即皇帝位、建元中統。公持詔、宣輸邊郡。
且擇諸軍、充侍衛。七月還朝。

とあって、中統と建元した五月より七月の間に、董文用は辺郡に宣諭し、諸軍を択んで侍衛軍にあてているのである。そして同年末には、元史(巻九十九)兵志鎮戍中統元年十一月の項に「平章塔察兒領武衛軍一萬人、屯駐北山」とあることによって、少なくとも一万人の武衛軍がいたことが確証できるのである。けれども中統元年にはいまだ制度として整っていたわけではなく、それが制度として確立するのは、都指揮使以下の官が設けられた中統二年と解するべきであろう。牧庵集(巻十九)侍衛親軍都指揮使李公神道碑には、

中統建元之明年、太尉當國、多勞公于上、上亦念從濟江、以爲侍衛親軍都指揮使・虎符。

とあり、また中堂事託(中)中統二年八月乙巳条(秋澗文集(巻八十一))には、

董文炳、授親衛軍都指揮使。其詞曰、某官性秉忠貞、才堪任使、積年事上、不違咫尺之天、今日定封、當處瓜牙之地。可特降虎符、授親衛軍都指揮使・同僉武衛軍事。尚嚴宿衛、益効勤勞、用副朕心、以成尓績。

とある如く、李伯祐と董文炳は、それぞれ中統二年に都指揮使に任じられているのである。同じく中堂事記によれば、鄭江が中統二年七月廿三日に、侍衛親軍副都指揮使・同判武衛軍事に充てられている。つまり中統元年四月に設置が着手された武衛軍は、中統二年になって組織的な確立をみるのである。(46)

翻って考えるに、世祖は即位にあたって、カラコルムにいた弟アリフブハを擁立する旧憲宗派と対立抗争に入ったため、何はともあれ直属の軍事力の増強が急務とされた。モンゴルを二分するこの抗争において、アリフブハ側には、憲宗の諸子をはじめ太宗の孫である海都、チャガタイの孫阿魯忽、及び旧憲宗派の権臣阿藍荅兒、渾都海らが附しているのに対して、世祖側には、太宗の子合丹や親弟フラーグ、それにオッチギンの子塔察兒らが附している。(47) その軍事力の優劣は俄に定め難いが、直属の軍隊というべきものを殆どもたなかった世祖は、憲宗時代に漠南漢地の「総督」として臨んで以来、結びつきの強かった漢人軍団を大きな拠り所とすることになる。そのために、諸路の漢軍、就中南宋攻撃のため河南に派遣され河南経略司の管下に入っていた部隊を北上させ、京師近辺に集結させているのである。(48) そこで次に中統初期(李璮の乱以前)に武衛軍の将校となっている者を表示し、具体的に軍の構成を検討していくこととする。

中統初期に武衛軍の将校に任じられているものは、管見の限りでは左の十五名である。このうち中統元年に武衛軍

初期侍衛親軍の將校表

氏名	職名	略歴	典據
董文炳	都指揮使	山東東路撫使、史天澤麾下、世祖潛邸につかえる	元史五卷一六本傳
李伯祐	都指揮使	史天澤麾下、千夫長、攝萬戶府	牧庵集九卷+侍衛親軍都指揮使李公神道碑
董文蔚	千戶	史天澤麾下、藁城等處行軍千戶	元史四卷八本傳
劉復亨	副都指揮使	嚴實麾下、行軍千戶	元史五卷二本傳
劉思敬	千戶	張榮麾下、征行千戶	同　右
李進	總把	初め張柔麾下、のち河南經略使史天澤に隷し、總把	元史五卷四一本傳
鄭溫	總管	史天澤麾下、總管	元史五卷四一本傳
張立	鎮撫	嚴實麾下、總把	元史六卷一五本傳
張泰亨	總把	父山、管軍千戶	元史六卷一六本傳
鄭江	副都指揮使	史天澤麾下、山東路都元帥	同　右
王昔剌	千戶	はじめ世祖につかえる	同　右
王國昌	千戶	膠州千戶、もと宋の海州戍將	同　右（同三卷憲宗二年三月條）
王仲仁	千戶	張柔麾下百夫長、憲宗八年、史天澤に配屬	紫山大全集五卷+王公神道碑
李文秀	千戶	濮陽人	雪樓集五卷+李氏忠節序
薛軍勝	礮手元帥	不明	元史五卷中統三年二月甲辰條

に入ったことが明記されているものは、李進一名、中統元年から二年とみられるのが、劉通、張立、王昔剌、王仲仁の四名、中統二年であることが明確なのが、董文炳、李伯祐、鄭江、董文蔚、劉思敬、張泰亨の六名、中統三年が鄭溫、不明なものが、王國昌、薛軍勝、李文秀の三名である。その官職をみると、董文炳と李伯祐が都指揮使に任じられており、劉復亨と鄭江が副都指揮使となっている。そのほか、鄭溫は総管、董文蔚、劉思敬、王昔剌、王國昌、李文秀、王仲仁はともに千戶、張立は鎮撫、薛軍勝は礮手元帥となっているのである。彼らの主な前歷を調べてみると、都指揮使となった董文炳と李伯祐は、いずれも史天沢麾下の部將である。董文炳は藁城千戶董俊の長子である。董俊が金末

に武仙の乱に遭って困難に直面した史天沢の真定奪還に、史氏の府僚であった李伯らとともに、力を尽したことは既述の通りである。李伯祐は、史氏の北京攻略直後に傘下に入り、史天沢が河南経略使として汴梁に赴いて後は、史氏と世々の姻戚関係を結んで真定における諸務を委されていたものである。史天沢の裨将である両者が都指揮使にあてられたことは、とりも直さず史天沢の軍事力がこの創設期の侍衛親軍と相当な程度関わりを有したことを示すものである。しかもこの両名のほか、鄭温、鄭江、董文蔚は、いずれも史天沢旧属の部将である。王仲仁と李進は、前節で述べたようにもともとは張柔の部将であったが、憲宗末年に河南経略使であった史天沢が憲宗に従って合州釣魚山を攻めるにあたって、諸路の精鋭を選んで一隊を編成したときに、その部隊に配属されたものである。また、劉復亨と張立は厳実の麾下であり、劉思敬は張栄の麾下である。しかしこの三名についても、その列伝をみると、憲宗の晩年に劉復亨と張立は合州の釣魚山攻撃に従事しており、劉思敬は董文炳に従って淮西の臺山寨を攻めている。釣魚山に赴いたことを見れば、張柔の部将であった李進らが史天沢に配属されたように、諸路の精鋭として史天沢の率いる部隊に入れられたとみるべきであろう。旧来より史天沢の部将である董文蔚、鄭温、鄭江もそのときには史天沢に従っており、例えば董文蔚はその際「鄭(州)の選兵を将いて西上」したというから、やはり諸路の精鋭の構成する部隊の中(の主力)にいたのである。また、都指揮使董文炳は世祖が憲宗の命で雲南に遠征したときに従って甘苦を共にしており、王昔剌も世祖の潛邸に給事しているから、世祖の親任の厚いものであったとみることができる。

要するに、初期の侍衛親軍(武衛軍)は、南宋攻撃に従軍して河南に屯駐し河南経略使史天沢に隷属した漢人軍団のうち、史天沢が憲宗に従って合州釣魚山を攻めるにあたって率いた精鋭部隊が、中央の軍として編成されたものであったのである。先に中書省についてふれたときに、中統二年五月に史天沢が中書右丞相に抜擢されたことを指摘したが、それは侍衛親軍という世祖直属の軍隊が、史天沢麾下の軍を基幹として編成されたことと何らかの強い関連性があったからと考えられる。このことは、別の側面からいうと、漢人軍団の地位・役割の向上をも意味する。エヘ＝モンゴル朝において既に漢人軍団のモンゴルに対する軍事協力は顕著なものであったが、そこにはモンゴル軍の補助的な要素が払拭しきれなかった。しかしここに元朝の禁軍として編成されたことは、一躍漢人軍団が元朝国家の軍隊の中枢を担うことになったことを物語るのである。

ところで、世祖はアリフブハとの抗争において、塔察兒

らの蒙古軍と成立間もない侍衛親軍を中心とする漢軍の軍事力、それに漢地の経済力にものをいわせて、戦局を優勢に導いていった。中統元年九月には諸王合丹、合必赤、統帥汪良臣を遣わして、西凉府に拠った阿藍荅兒、渾都海らを破らせ、続いて二年十一月には昔木土脳兒の地でアリフブハを撃破し、勝利を決定づけたのである。かくして侍衛親軍は世祖直属の軍隊としての設置意義を如実に示すことになったのである。さらにその成果は次の李璮の乱においても遺憾なく発揮される。

李璮は金末山東に蜂起した紅襖賊の一首領李全の子（義子ともいわれる）で、父子二代約五十年にわたって、モンゴル、金、南宋の間に介在する大勢力を保持した。李全は一たん南宋に帰附して忠義軍と号する兵を統べていたが、太祖二十二年（一二二七）モンゴルに投降した。[49] しかし李全父子は投降後もモンゴルに対して協力的な態度を示したわけではない。元文類[巻五十]済南路大都督張公行状に載せられている李璮の「逆跡十事」の一項に、

上略。又諸路兵久従征伐、不得休息、率皆困弊。而璮假都督之重、擁彊兵至五七萬、日練習整厲、名爲討宋、而實不出境。士卒唯知璮之號令、不復知禀朝廷之命。

とある如く、諸路の兵は久しく征伐に従っているのに、李璮の五・七万程の兵は、朝廷の命令に従うことなく、南宋征伐にも出ず、毎日のように練習整厲していたというのである。そうした李璮は、中統三年二月、ついに漣海の地を南宋に献じて、元朝に反旗を翻した。はじめのうちは南宋の支持もあって勢い甚だ盛んであったが、元朝が諸王合必赤と右丞相史天沢のもとに大軍を派遣したため、僅か五ヶ月にして鎮圧された。派遣された大軍の中には無論武衛軍も含まれており、乱の収集に大きな役割を果たした。牧庵集[巻十九]侍衛親軍都指揮使李公神道碑には、

又明年、李璮反、盜據濟南。徵兵諸道誅之、衛士亦在遣中、大軍屼老鶬口、公與董忠獻公合請太尉泣軍、報可。太尉至、築夾寨遏奔突、以待三月、璮窮而縛、梟磔以徇。

とあるが、諸道の兵とともに衛士（侍衛軍の兵士）が鎮圧に赴いており、老鶬口で苦杯を嘗めた元朝側は、李伯祐と董文炳の上請によって史天沢に軍を統べさせ、乱をすみやかに平定することができたのである。李伯祐と董文炳が出向いていることからみても、武衛軍は全面的に乱の鎮圧のために投入されたと考えられる。

このように李璮の乱が比較的短期間で鎮圧された要因として考えられることは、十路宣撫司の設置など行政面での漢人世侯権限の削減もあろうが、それとともに元朝政権が侍衛親軍を中心に集中的に兵力を投入できたことを挙げなければならない。前節で論述したように、漢人世侯の軍（私

兵）は、太宗朝にモンゴルの正規軍に編入され、憲宗朝になると、それらの漢軍は、南宋攻撃のために河南及び四川方面へ送り込まれた。世祖はそれらの精鋭―とくに河南方面の軍―を侍衛親軍として編成したのである。つまり、侍衛親軍の成立は、軍事力の集権化を推しすすめることになり、元朝は効果的に軍を掌握することができたのである。このことは漢人世侯の側より見れば、その精鋭が中央に吸収されたため、事実上解体に瀕することになったのである。李璮の反乱鎮圧後、完全に漢人世侯が廃止されるのは[50]、そうした集権化のいきつくところである。

さて李璮の乱が治まり、元朝の国家体制が確立してくると、南宋攻撃が再開されることになる。そのために既成の軍のほかに、大いに漢兵を徴して襄陽に赴かせた。道園学古録巻四十淮陽獻武王廟堂之碑には、

六年、大括諸道兵、益圍宋襄陽。益都淄莱等路行軍萬戸。

とあり、牧庵集巻十八南京路總管張公墓誌には、

六年、授朝列大夫、佩金符。責貢安南。時已徴天下兵數十萬、圍襄陽。

とある如く、十万の軍が徴せられて襄陽を包囲しているのである。彼らはモンゴル軍の不得手とする江南での戦闘に中心的な役割を果たしていくことになる。漢軍の増加にともなって、侍衛親軍も強化される。中統年間に武衛軍と呼ばれていたが、至元元年には侍衛親軍と改称され、至元八年には、右・左・中の三衛となった。このときも侍衛親軍に編入されたのは主として漢軍である[51]。その後南宋を平定すると、旧南宋軍の精鋭を再編成して前・後二衛を設け、所謂五衛が整う。侍衛親軍が南宋攻撃に従軍したことはいうまでもないが、南宋の征服と相前後して北方の情勢が慌しくなると、その方面にも派遣されることになる。静軒集巻五劉氏先塋碑には

江淮悉平。奉詔入朝、賞銀千兩、及銀衣・弓矢・鞍轡之屬、仍賜璽書・金虎符、僉書西川行樞密院事。未赴、有詔、統侍衛軍、鎮撫北方。師還、遷鎮國上將軍・漢軍都元帥。賜以内府錦衣・玉帶・弓矢・鞍轡、及寶鈔五千緡。復領侍衛軍萬人、北至金山、屯田和林。安集歸化戸民、所全活者、餘數萬□[戸]。

とあり、劉國傑は、南宋が平ぐと一転して侍衛軍を率いて北方に鎮撫し、一度還ったあと再び侍衛軍万人を率いて和林に屯田を行っているのである。また元史巻一六七王通伝には、

十四年、改侍衛親軍千戸。明年、通上書言、今南方已定、而北陲未安、請屯田于和林、率所部自效。帝慰勞遣之。從破敵兵于金山、俘獲生口及馬羊牛駝、不可勝計、進顯武將軍、賜金虎府、陞僉左衛親軍都指揮使。從討叛王乃顔、遷副都指揮使。明年、屯田瓜、沙諸州、進階明

威將軍。

とあって、王通は至元十五年北陲の混乱を治めるために和林に赴いて屯田している。時期からいって先の劉國傑に従ったのであろう。侍衛親軍はこのときを契機として以後元代を通じて和林方面に屯駐することになった。[52]

こうしてみると、漢人軍団は、禁軍である侍衛親軍、それに南宋攻撃の軍（南宋平定後は、鎮戍軍として改編される）の主力を占め、しかも侍衛親軍はモンゴル国家発祥の地である和林方面にも赴いている。つまり元朝の国家権力を支える軍事力は主として漢人軍団に依存していたといっても過言ではないのである。

おわりに

以上、侍衛親軍の成立という点を中心として、元朝成立史の一側面と、エヘ＝モンゴル朝より元朝に至る漢人軍団の地位・役割について考察した。問題は多岐にわたったが、それを要約すれば次のようになる。

㈠、侍衛親軍は、世祖フビライが、アリフブハとの抗争の際、河南経略使史天沢麾下の漢人部隊を基幹として編成したものである。㈡、史氏は、投降当初から極めてモンゴル軍に協力的で、華北各地に従軍する一方、北京ついで真定に鎮守し、その地で勢力を形成した。㈢、エヘ＝モンゴル朝における漢軍は、既に太祖朝において、モンゴルの金朝攻略に大いに貢献した。それが本格的に正規軍に編入されたのは、太宗六年のことであった。憲宗朝には、そのほかに新たに漢兵が徴され、南宋攻撃に従った。㈣、侍衛親軍は、他ならぬ漢人部隊によって成立したが、そのことは、世祖政権が明らかに漢軍に依存していたことを示している。

従来とかく元朝史はモンゴル人を頂点とする身分社会のわくぐみでとらえられ、国家体制の中での各民族の役割や相互関係は、あまり顧みられなかった。本稿で明らかとなったように、漢人（軍団）は決して元朝の政権機構から排除されるものではなく、むしろその存立を支える大きな柱であったということができるであろう。ただし、本稿では漢人軍団を制度面より窺うにとどまった。漢人軍団と世侯の軍（私兵）との実質的な相違や、あるいはまた他の元朝諸軍との関連などについては、後日稿を改めてとりあげることとしたい。

註

（1）元史（巻十九）兵志宿衛条巻頭。侍衛親軍の概要は、箭内亙氏「元朝怯薛考」（『蒙古史研究』〈刀江書院、一九三〇〉所収）二四七―二五四頁参照。

（2）堀敏一氏「五代宋初における禁軍の発展」（『東洋文化研究所紀要』四、一九五三）。

（3）蕭啓慶氏「元代的宿衛制度」（辺政研究所年報第四期、一九七二）六六―六七頁。

（4）和田清編『支那官制発達史』（汲古書院、一九四二）、三一七頁。

（5）黒韃事略に「漢地萬戸四人、如嚴寔之在鄆州、則有山東之兵、史天翼（澤）之在眞定、則有河東・河北之兵、張柔之在滿城、則有燕南之兵、劉黑馬之在天城、則有燕薊・山後之兵。他雖有領衆者、俱不若此四人兵數之多・勢力之強也」とある。雪楼集（巻十六）済南公世徴碑では、張栄を四諸侯の一人に数えるが、ここでは一応前者に従っておく。

（6）愛宕松男氏「李璮の叛乱と其の政治的意義―蒙古朝治下に於ける漢地の封建制とその州縣制への展開―」（『東洋史研究』六―四、一九四一、九）

（7）モンゴル初期の軍官は、「時官制惟左右萬戸、次千戸。非勲戚不與」（中庵集（巻十五）丞相順徴忠献王碑）とある通り、左右万戸と千戸があるだけで、勲戚でなければなれなかった。そうした官に投降直後の史天倪が任じられたというのは、あまりにも不自然である。モンゴルに投降した漢人には、一般に投降時の官職がそのまま許されていたから、史天倪のそれも金末の自称化した万戸と解すべきであろう。それは、天倪のその後の官職が〈万戸→馬歩軍都統→右副都元帥→河北西路兵馬都元帥・行府事〉と変遷していることによっても窺える。また天倪が馬歩軍都統を授けられたときに管領したといわれる二十四万戸も到底モンゴル軍制のものとは考えられない。金末の官制は「千戸自り上には、萬戸有り、副統有り、都統有り、副提控有り。十羊九牧にして號令一ならず」（金史（巻一〇九）陳規伝）のありさまで、千戸、万戸といっても、「仍お三十人を一謀克と爲し、五謀克を一千戸と爲し、四千戸を一萬戸と爲す」（金史（巻一〇）古里甲石倫伝）とあるように、殆ど有名無実化していた。

（8）池内功氏「史氏一族とモンゴルの金国経略」（『中嶋敏先生古稀記念論集』一九八〇、十二）。

（9）自衛集団に関しての史料は比較的恵まれているが、そのうちその結成のあり方を具体的に示すものをいくつかまとめて表示しておく。

首領	出身地	家柄及び略歴	集團の構成	據點	初め與えられた官職	典據
張柔	易州定興	農、騎射	族黨	西山東流寨	定興令	元史四巻七一本傳
張榮	濟南歷城	財家、嘗て從軍	鄉民	濟南黌堂嶺	山東行尚書省(モンゴル)	雪樓集六巻十濟南公世德碑
趙柔	淶水	騎射、施與	鄉井の人	柵	涿易二州長官(モンゴル)	元史五巻一一本傳
王鈞	鳳翔岐山姜村	父は千夫長、俠	鄉兵萬人	拙山、のち三稜堡	都提控	牧庵集十巻二王公神道碑
姬汝作	汝陽	讀書知義	鄉鄰數百家	崧山、のち交居山	北山招撫使	金史一巻一三三本傳

(10) ドーソン著、佐口透訳注『モンゴル帝国史』1（平凡社、一九七二）一三九頁。

(11) 元史一巻四九劉伯林伝、同上一巻四九石天應伝、寓庵集六巻故宣差京兆府路都總管田公墓志、等参照。

(12) 元史一巻五五史天沢伝。史天倪が真定に鎮守している間も、史氏一族の多くは北京に留まっていたと考えられ、彼らが真定に移るのは、史天沢が真定を回復してより後のことと推測される。なお武仙の乱の経過については、孫克寛氏「金將武仙本末考」（『元代漢文化之活動』〈台湾中華書局、一九六八〉所収）参照。

(13) 清河集七巻藁城董氏家伝、及び牧庵集十五巻董文忠神道碑。

(14) 元史一巻五〇石抹也先伝には「（張）致既伏誅、也先籍私養敢死之士萬二千人號黑軍者、上于朝」とある。元史一巻四九石天應伝、同上一巻五一石抹孝迭兒伝にも黒軍を領したことが記されているが、二人とも石抹也先の麾下であった可能性が高い。また史天祥も本伝に「得錦州舊將杜節・并黒軍五百人、即命統之」とあるから、錦州張致の旧軍を、錦州攻略に戦功のあった石抹也先等に分け与えたものではないかと思われる。

(15) 良家の子というのは、同じ張仝のことを伝える乾隆永清県志十巻二に「先世業農、支属蕃息」とあり、また遺山文集十巻三西寧州同知張公之碑には「世爲獲鹿人。曾王父明、王父顯、父丙、三世在野、叔父帥府監軍昇、少日以良家子充南征軍士」とあり、同右八巻二廣威將軍郭君墓表には「曾大父晏、大父興・父詡、三世在野、中略、曾明明昌官制行、乃用良家子、明法理、慎動止、推擇爲吏」とある。以上の諸例からみると、数代（三代か）にわたって農を業とし任官しなかった家を指すものと思われる。

(16) 乾隆永清県志の「史進道碑」によれば、史進道の長女の婿で、北京管民長官万戸となった張之翼は史氏と同里の人である（池内氏前掲論文参照）。張之翼も清楽軍の一員とみなされよう。

(17) 元史巻一四八董俊伝、同巻一四七史天倪伝。

(18) 元代の経歴は、正官と吏との間にあって文書事務を総領する首領官の一つであるが、当時の経歴は軍需品の調達や参謀にも与ったようである。元史巻一六三張徳輝伝、秋澗文集巻五一大元故奉訓大夫尚書禮部郎中致仕丁公墓碑参照。

(19) 金史巻五十五百官志によると、都元帥府の官には、都元帥以下左副元帥、右副元帥、元帥左監軍、元帥右監軍、左都監、右都監がある。

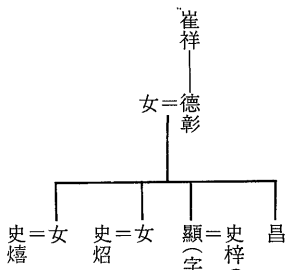
(20) 牧野修二氏「元朝中書省の成立」(『東洋史研究』二五―三、一九六六) 六五頁。

(21) 同じく元史巻一五一に伝のある趙迪、王義も王玉らと相前後して史氏の麾下に入っていったと考えられる。また在地勢力ではないが、馬石田文集巻十三に載せられている劉議と馮安が史天倪と史天沢の麾下で活躍しているのは、史氏が真定に軍事的基盤を確立していく上で注目される。

(22) 陶晉生氏「金元之際女眞與漢人通婚之研究」(『田村博士頌壽東洋史論叢』一九六八) 及び池内氏前掲論文参照。

(23) 牧庵集巻十五董文忠神道碑。董俊の子文忠の娘が天沢の第八子彬に嫁しているわけで、厳密にいえば、元朝に入ってからのことであろう。

(24) 崔氏が史氏麾下に入ったのは大寧においてであるが、両氏が姻戚を結んだのは真定鎮守後であろう。というのは、崔徳彰は太宗四年頃に生まれており、その頃には既に両氏は真定に移っていたと考えられるからである。ちなみに両氏の姻戚関係は左図のようになる。



(25) モンゴルへの来帰が河北に比べて遅かった山東の漢人世侯においても姻戚関係は一般に行われたと思われる。例えば厳実は腹心の張晋亨（元史巻一五二本伝）と、張栄は幕府提領の王忱（中庵集巻十七済南王氏先徳碑）と、それぞれ姻戚を結んでいる。なお、厳実、張栄らと史天沢、張柔らの相違については、井ノ崎隆興氏「蒙古朝治下における漢人世侯―河朔地区と山東地区の二つの型―」(『史林』三七の六、一九五四) 参照。

(26) 本田実信氏「チンギス＝ハンの軍制と部族制度」(『歴史教育』九―七、一九六一)十二頁。

(27) 張柔が太祖二十年(本紀では二十一年)に行軍千戸・保州等処都元帥を授けられているのや(元史四七一本伝)、劉黒馬が太祖十七年に父伯林の職を襲って万戸となっているのは(同右四九一本伝)モンゴル軍制の適用とみられる。但し太祖朝には金の遺制とモンゴルの軍制が混同して用いられているため、詳細は後日の課題とせざるを得ない。

(28) 元史四九一耶律秃花伝には札剌兒とあり、元朝名臣事略七丞相史忠武王伝には蕭某とある。いずれも石抹札剌兒を指すとみられる。一方牧庵集七十邸公神道碑では粘合重山とする。屠寄『蒙兀兒史記』十五には、札剌兒(一名重喜)伝がたてられているが、その依拠するところは明らかでない。

(29) 前田直典氏「元朝行省の成立過程」(『元朝史の研究』〈東京大学出版会、一九七三〉所収)一四七―一五三頁。

(30) 七万戸のうち太宗初年に万戸となった三人と厳実、張柔は明らかであるが、残る二名は今のところ明らかとし得ない。漢人の万戸はこれ以後も増置されていくが、その一端は蒙兀兒史記十五邸郝王梁孟五萬戸伝参照。

(31) 安部健夫氏「元代知識人と科擧」(『元代史の研究』〈創文社、一九七二〉所収)一九頁。

(32) 遺山文集十六順天萬戸張公勲徳第二碑。

(33) 憲宗初年の燕京等処行尚書省は、也可札魯忽赤の牙老瓦赤、卜只兒を長とするが、必ずしもこの時に創設されたというわけではなく、太宗六年頃に設けられた漢地統治札魯忽赤機関(漢稱燕京行台、燕京行省、中都行台)を継承したものである。詳しくは牧野氏前掲論文七一頁参照。

(34) 和田清編『支那官制発達史』(汲古書院・一九四二)二七六―二七七頁。

(35) 元史三憲宗元年辛亥夏六月条。

(36) 唐・鄧両州以外で屯田の行われた所は、元史四六一楊惟中伝によれば、申、裕、嵩、汝、蔡、息、亳、潁の諸州である。またこのとき前線である鄧州の屯田万戸になったのは、牧庵集十六榮祿大夫福建等處行中書省平章政事大司農史公神道碑に「世祖淵龍、以憲宗母弟總天下兵。起平宋本、置屯田經略司于河之南。以太尉爲使。都督爲屯田萬戸、將兵二萬戍鄧、當荆閫衝。」とある如く、史天倪の子で後に都督(江漢大都督)となった史権である。

(37) 元史を繙くに、木華黎の一族で憲宗の時にしばしば戦功を立てた忙哥(一九一塔塔兒台伝)と、畏答兒の子で忽都忽の乙未年籍に基づいて泰安州民万戸を授けられた

忙哥(巻二)畏答兒伝）の二名がそれらしき人物として見出されるが、相方とも河南経略使になったという明記がなく、ここでの断定は差し控える。

(38) 元史(巻一四六)楊惟中伝、同上(巻一五九)趙璧伝。

(39) 田村實造氏「アリクブカの亂―モンゴル帝國から元朝へ―」（『中國征服王朝の研究』中〈東洋史研究会、一九六七〉所収）四六九―四七〇頁。

(40) 宮崎市定氏「鄂州之役前後」（『内藤博士頌壽記念史学論叢』一九三〇）参照。

(41) 牧野修二氏「十道宣撫司―フビライ政権集権化の布石としての―」（『東洋史学』二八、一九六五）。

(42) 愛宕氏前掲論文、二十―二十二頁。

(43) 牧野氏前掲論文、註(20)参照。

(44) 元史(巻五)至元元年十月戊辰条。武衛軍という名称は、近くでは金の京師防城軍につけられたものがある。（金史(巻一四)兵志）。中統年間に武衛軍と称せられたのは、京師防衛の性格が強かったためであろう。元史(巻一九)兵志宿衛条に「世祖中統元年四月、諭隨路管軍萬戸、有舊從萬戸三哥西征軍人、悉遣至京師充防城軍」とあるのは、その傍証となる。三哥というのは史天沢（史秉直の第三子）を指すものと考えられる。なお、中堂事記(中)中統二年七月廿三日癸未条には「鄭江授侍衛官。(中略)就帶已降金牌、充侍衛軍副都指揮使・同判武衛軍事、景州軍民長官如故」とあるから、侍衛親軍の名は既に中統年間に、禁軍の総称（といっても当時は武衛軍のみであろう）として用いられたようである。

(45) 蕭啓慶氏前掲論文、六七頁。

(46) 元史(巻一四八)董文蔚伝、及び同上(巻一五六)董文炳伝に、武衛軍（侍衛親軍）の設置を中統二年とするのは、本文で述べた意味で正しいといえよう。

(47) 田村氏前掲論文、四七五頁。

(48) 漢軍が京師附近に駐屯したことを記すものを元史の中から抜き出し左に列挙する。

徵諸路兵三萬、駐燕京近地。(巻四中統元年五月乙未条)

詔東平路萬戸嚴忠濟等、發精兵一萬五千人、赴開平。(巻四中統元年六月乙卯条)

阿里不哥反、世祖北征。詔柔入衛、至廬朐河、有詔止之、分其兵三千五百、衛京師、以子弘慶爲質。(巻一四七張柔伝)

世祖中統元年五月、詔漢軍萬戸、各於本管新舊軍内、摘發軍人、備衣甲器仗、差官領赴燕京近地屯駐。萬戸史天澤一萬四百三十五人、張馬哥二百四十人、鮮成一千七百六十人、乞叱剌四百六十六人、斜良拔都八百九十六人、扶溝馬軍奴一百二十九人、内黄鐵木兒一百四十四人、趙奴懐四十一人、鄢陵勝都古六十五人。(巻一九兵志鎮戍条)

(49) 池内功氏「李全論—南宋、金、モンゴル交戦期における一民衆叛乱指揮者の軌跡—」(『社会文化史学』十四、一九七七、七)参照。

(50) 愛宕氏前掲論文。

(51) 李璮の乱鎮圧後は、まず李璮の旧兵が侍衛親軍に編入された。(元史巻五中統三年九月戊午条・同中統四年四月癸丑条)。その後諸路の「富強才勇」の兵が選入され(同巻六至元二年十二月丁亥条等)、所謂強幹弱枝の体を保持した。そのほか高麗軍、女真軍も編入されているが(同巻六至元三年正月癸丑条・同巻十九兵志宿衛条)、両者も広義の漢人に含めてよい。蒙古人、色目人が侍衛親軍を構成するようになるのは、五衛の設けられた至元十六年以後のことである。

(52) 元典章巻十四戸部「不得打量漢軍地土」条、元史巻十一大徳七年二月丙子条。

(補註) 投降漢人の役割については、池内功氏「モンゴルの全国経略と漢人世侯の成立(四)」(『四国学院大学論集』四九、一九八一、七)に詳細な考察がなされている。同氏も、初期投降者(氏は、とくに北行漢人、すなわちモンゴルと金との講和成立以前に投降し、北還するモンゴル軍に従って北行した漢人、と規定する)のモンゴル軍の先鋒及び新占領地への配置の役割を強制されている。